特集 私たちのコトバ・彼らのコトバ

ニホンゴを使う人たちと日本社会

日本で暮らす上で、日本語が使えることが前提とされる場面は少なくありません。
けれども実際には、日本で生まれ日本語を第一言語とする人だけでなく、さまざまなルーツを持つ人、聴覚や視覚に障害がある人など、多様な背景を持つ人々が暮らしています。
彼らは日々の生活の中で、どのようなコトバを使い、日本語とどのように向き合っているのでしょうか。
言語はどれも等しく価値を持ちますが、現実の生活では優先順位がついてしまうこともあります。
異なる背景を持つ5人に、自分を取り巻く言語環境や、自分を支えるコトバへの思いを聞きました。
そこで語られたことは、日本で生まれ日本語を第一言語とする、いわばマジョリティにとっても、コトバとの向き合い方を見つめ直すきっかけになるかもしれません。

自分の話しているコトバは日本語ではなかった



下地賀代子 しもじ・かよこ
沖縄国際大学 総合文化学部 日本文化学科 教授

――生まれ育った環境について教えてください。

沖縄島南部の東風平（こちんだ）町（現・八重瀬町）で生まれ、大学卒業まで過ごしました。父は宮古諸島の一つ多良間島（たらまじま）、母は宮古島の城辺（ぐすくべ）の出身です。

――どのようなコトバを使っていましたか。

第一言語はいわゆる「ウチナーヤマトゥグチ」だと思います。沖縄語（北琉球語沖縄方言）と日本語が接触してできた地域共通語です。父とも母とも、私はウチナーヤマトゥグチで話します。父は、方言の使用を制限する標準語励行の世代です。イントネーションを直そうと意識し、若いころは「なまりが少ない」と言われることがうれしかったそうです。

父方の祖父母を多良間島から呼び寄せて同居していました。晩年の祖父は多良間方言しか話さず、当時の私はそれがまったくわかりませんでした。祖父と話した記憶はほとんどなく、まれに話をするときは祖母に通訳してもらっていました。父と祖父母の会話、また宮古島出身の母も多良間方言がだいたいわかったので祖父母が母に話すときも、多良間方言が使われていました。こどものころ日中は、いとこたちと一緒に祖母に預けられていたのですが、大人同士でこどもに聞かせたくない話をするときは、あえて多良間方言を使っていたように思います。内容はわかりませんが、こどもたちのことで小言を言っているときは声のトーンでわかりましたね。

第一言語はウチナーヤマトゥグチだと言いましたが、実は、自分が話しているのは普通の日本語、「標準語」だとずっと思っていました。大学院に進んで千葉で暮らすようになると、なまっていると言われました。そこで初めて、自分が話しているのは普通の日本語ではなかったのだと自覚したのです。

――コトバをめぐって、違和感を覚えたことはありましたか。

忘れられない経験があります。大学院で初めて研究会発表をしたとき、指示連体詞の説明で、「あんな」「こんな」「そんな」と言ったら、そのイントネーションが面白いと、しばらくからかわれました。標準語では三つ目の音から高く発音しますが、私は最初の音を高く発音していたのです。沖縄では何の問題もなかったのに、標準語と違うからおかしいと言われ、理不尽に感じました。今でこそ、特に公の場では標準語のイントネーションで話すように気を付けていますが、あの時、からかわれたことを思い出すといまだにモヤモヤします。

――どのような経緯で琉球語の研究をされるようになったのですか。

琉球大学で日本語教育を専攻しながら、琉球語のゼミに入りました。父が多良間島出身で、祖父母とも同居していることをゼミの先生に話したところ、「多良間方言の研究をしなさい」と強く勧められたのです。それを受けて、多良間方言をテーマに卒業論文を書きました。大学院は琉球大学も考えましたが、先生方から「県外に出たほうがいい」と言われ、千葉大学の大学院に進みました。

――大学院ではどのような研究をされたのですか。

修士課程、博士課程ともに、引き続き多良間方言の文法記述に取り組みました。卒業論文は、祖母のコトバを調査してまとめたものです。大学院では、多良間島に通い、遠縁の人に協力していただき調査を行いました。

祖父方の屋号を言って、その家の孫だと伝えると、すぐに素性を理解してもらえました。よく「多良間の顔をしているね」と言われ、自分の居場所に帰ってきたと感じたこともあります。島と何のつながりもない人よりは有利な立場で調査ができたと思います。ただ、島のことを知れば知るほど、自分は半分、外の人だという感覚が強くなっていきました。

――沖縄国際大学で授業をする中で、気になったことはありますか。

琉球語学概論という科目を担当していて、その科目では、まず、奄美から与那国まで琉球各地に多様なコトバがあることや、危機言語や継承活動について講義します。その後、継承活動の必要性についてグループごとにディスカッションを行うのですが、今年は「いらない」と考える学生が去年より大きく増えました。理由として挙がったのは、「使われていないコトバだから、なくなってもしょうがない」「文化として残す必要があるなら、記録があればいい」といったものです。一方、「いる」と考える学生は、「アイデンティティである」「沖縄の良さを県外にアピールするポイントになる」などを理由に挙げていました。

この傾向から、若い世代に関して言えば、継承活動に対する意見が二極化している印象を受けています。また、「いる」と考える学生は熱量が高く、今後、継承活動に参加してくれるのではないかと期待しています。

――50年後、琉球語やウチナーヤマトゥグチは、どのようになっていると思われますか。

琉球語がかつてのような生活言語の中心になることは、厳しいかもしれません。でも、関心を持つ人は、これからも居続けると思います。多良間島でも継承活動に取り組み始めた人たちがいます。これをきっかけに、話せる人が増えるかもしれません。一方で、話せるようになりたいと頑張っている人に対して、話せる人が「間違っている」「変だ」と圧をかけてしまうことがあります。それで話さなくなってしまう人も実際にいます。こうした問題の解決も欠かせません。

ウチナーヤマトゥグチについては、地域によって大きな差が出ると思います。例えば、沖縄島の南部では、那覇などの都市部を中心に、なまりの薄れた全国共通語に近いコトバに変わるかもしれません。私自身も、以前のような自然ななまりを出せなくなっています。一方、中部では、アイデンティティとしてなまりを強調している人も多いことから、形を変えながらも、特徴のあるコトバとして50年後も残っているのではないかと思います。

日本手話と日本語のバイリンガルに



重田千輝 しげた・かずき
手話指導者

――生まれ育った環境について教えてください。

1990年、大阪府枚方市生まれです。生まれたときから耳が聞こえませんでした。妹以外の家族も聞こえません。家族もろう者の場合、こどもはろう学校に通うことが多いのですが、私がろう学校に通ったのは幼稚部までで、小学校からは地域の学校に通いました。一番近いろう学校まで電車で1時間半かかり、通学が難しいなどの事情があったのです。

――学校の授業や友達とのコミュニケーションは、どのようにしていたのですか。

小学校と中学校では、友達が指文字（日本語の五十音を一文字ずつ指の形で表現する方法）を覚え、コミュニケーションを取ってくれました。授業では、情報保障として、先生が私の隣で授業内容を紙に書いてくれました。そのため、あまり困ることはなかったように思います。

高校に入ると、指文字を覚えてくれる人がいなくなり、コミュニケーションがうまく取れませんでした。孤独を感じ、学校にあまり行かなくなった時期もあります。それでも何とか卒業し、筑波大学に進学しました。

筑波大学には手話サークルもあり、手話を使える人も多かったので、手話でのコミュニケーションが中心になりました。授業ではノートテイクやパソコンテイクの支援を受けていて、2人の支援者が私の両脇に座り、先生の発言をすべて文字情報にしてくれます。小中学校時代はメモ程度だったので、情報量がまったく違います。当時は、先生が冗談を言ってみ

自分たちのコトバを使うのは普通のこと

小波津ホセ Jose Kohatsu
慶應義塾大学 環境情報学部 非常勤講師
NPO法人日本ペルー共生協会 理事長

アギーレ マリエル Aguirre Mariel
宇都宮大学大学院 博士後期課程





んなが笑っていても、理由がわからず戸惑うことがありました。大学のノートテイクでは、先生の冗談もすべて書いてくれます。そのため、タイムラグはありますが、みんなと一緒に笑えるようになりました。

――手話には種類があります。日本手話と日本語対応手話のどちらを使っているのですか。

私の第一言語は日本手話です。両親は私と会話するときに日本語対応手話やキュードスピーチ（音声言語を口の形と手の動きで表す方法）を使うことがありました。これは、私がこどものころ「日本手話は、日本語と違っていて変だ。日本語対応手話やキュードスピーチは、日本語の語順のとおりなので、わかりやすくてきれいだ」という考え方が強かったからだと思います。

今は時代が変わり、「日本手話は日本語とは別の言語である。日本手話ができるのは、かっこいい」という考え方も広がってきました。今の若い人たちには、のびのびと日本手話を使っている人も多く見られます。

このように、どちらの手話を使うかは、その時々の社会の考え方に影響されるのではないかと思います。

――手話にも地域差がありますが、大阪とつくばで違いを感じましたか。

高校を卒業するまでは大阪の手話を使っていました。つくばでは、東京の手話を使う人が多いです。大阪の手話では読み取ってもらえないこともあるので、私も東京の手話に変えていきました。ちなみに、筑波大学の学生だけにわかる手話もあります。

つくばには、ろうの学生や手話を使える人がたくさんいました。そのため、内緒話をするときは、周りに手話がわかる人がいないか確認する必要があり、どうしても話を知られたくないときには筆談をすることもありました。また、つくばでは、コンビニやスーパーの店員さんも、ろう者への対応に慣れていたように感じます。手話ができなくても、身振りや指さしでコミュニケーションを取ってくれる場面が、生活の中で多くありました。

――日本語との付き合い方で困ったことはありますか。

日本手話と日本語は異なる言語であり、私の第一言語は日本手話です。そのため、日本語の文章の内容を正確に理解することは、日本語を第一言語とする人よりも難しいのです。教科書がすべて手話で表現されていればいいのに、と思ったこともあります。しかし、それはかなわないことなので、日本語の文章を読み解きながら勉強するしかありませんでした。少し変な言い方かもしれませんが、教科書がすべて手話だったら、私は東京大学にも行けたのではないかと思うこともあります。

情報の得やすさという点では、日本語のほうが有利なときもあります。例えば、図書館で調べものをするとき、資料がすべて手話の映像であれば、必要な情報にたどり着くまでかなり時間がかかるでしょう。日本語の本を読んだほうが、短時間で済むはずです。ただし、深く理解したい、じっくり考えたいという場合には、日本手話での映像があったほうが助かります。状況に応じて使い分けができる環境があれば、理想的だと感じています。

――言語コミュニケーションに必要な四技能として、「読む」「書く」「話す」「聞く」が挙げられます。最近では、これに「見る」を加える必要があると言われ始めています。目で見る言語である手話を聴者も使うことで、聴者とろう者の関係はもっと近くなり、コミュニケーションも深まるのではないでしょうか。そうした考えについて、どのように思われますか。

聴者も手話を使えると、声が届かない場所で危険を知らせるときや、声が出せない場所でのコミュニケーションに役立つと思います。ろう者も、日本語を身に付けることで役立つ場面が多くあります。そうすることで、お互いの理解をもっと深められ、社会の障壁も減っていくのではないでしょうか。日本語と日本手話を学ぶというバイリンガル教育の考え方を、ぜひ広げていってほしいと願っています。

――生まれ育った環境について教えてください。どのコトバを使っていましたか。

小波津：1984年にペルーの首都リマで生まれました。父はペルー人、母は日系二世です。8歳のとき、先に日本で生活していた両親に私と兄が呼び寄せられるかたちで、福岡県北九州市に来ました。

父母がペルーを離れた後は、母の実家で暮らして日系人学校に通っていたので、日本語は学んでいました。しかし、来日当初は、平仮名がどうにか読めて、いくつかの単語を使って話せる程度だったと記憶しています。小学2年生の3学期に転入し、3年生の夏ごろまでは、別室で日本語を教えてもらう取り出し授業を受けました。それ以降は特に支援を受けることなく、高校卒業まで北九州市で暮らしていました。

ほかのペルー人家族とはほとんど関わりがなかったため、スペイン語を使う機会は家庭の中だけでした。しかも、来日して1～2年ほどたつと、親からスペイン語で話しかけられても日本語で答えるようになり、兄とも日本語で会話するようになっていきました。

アギーレ：1997年に日本で生まれ、日本で育ちました。父は日系ペルー人、母はペルー人です。生後半年くらいから保育所に預けられていたこともあり、日本語で苦労したことはありません。ただ、自分の外見や、名前が漢字ではないことを気にしていたように思います。

両親は日本語が必要最低限しか話せなかったので、両親とはスペイン語、姉とは日本語というように、相手によってコトバを切り替えていました。当時住んでいたアパートには、私たち以外にもペルー人の家族が2世帯ほどいて、週末にはよくバーベキューをしていた記憶があります。ほかにも交流のあるペルー人家族がいて、スペイン語はよく使っていたほうだと思います。

地元の小学校には外国人が多く通っていたため、日本語教室が併設されていました。自分では困っていませんでしたが、母が心配し、私も日本語教室に通うことに。しかし、すぐに先生から必要ないと言われ、その後はずっと通常の授業を受けていました。

――お二人とも宇都宮大学、そして大学院に進まれています。

小波津：高校卒業後は専門学校に進み、神奈川県海老名市に2年間住んでいました。海老名市にはペルー人が多く住んでいますが、交流はありませんでした。就職活動をしたものの納得できず、ペルーに一時帰国してスペイン語の再習得を目指すことにしました。1年の予定でしたが、自分の居場所を見つけることができて、結局6年ほどペルーに滞在することになったのです。そして2011年に再来日しました。日本で暮らす親のこともありましたし、日本で再挑戦したいという思いがあったからです。いったん就職した後、宇都宮大学に3年次編入しました。大学院では、日本で暮らすペルー人の若者について研究し、2020年に博士号を取得しています。

アギーレ：私が高校生のとき、宇都宮大学に通っていた姉が、大学の外国人児童生徒教育支援事業「HANDS事業」に携わっていました。姉から「活動を見に来ない？」と誘われたことがきっかけで、私もこういう活動に取り組みたいという思いが芽生え、宇都宮大学に進んだのです。入学後は、外国人児童生徒教育に関する授業を取ったり、ボランティアに行ったりする日々を過ごしました。現在は、大学院博士後期課程の4年目に在籍しています。

――使っているスペイン語について、人から評価をされたことはありましたか。

小波津：ペルーに一時帰国した当初は、とても大変でした。耳はスペイン語に慣れていて、日常会話程度なら聞き取れましたが、ほとんど話せなかったのです。頑張って話しても、使える語彙が少なく、発音も不自然で、ペルー育ちではないことにすぐ気づかれたと思います。実際に指摘されることもありました。私のスペイン語は、ペルー育ちの人と比べてイントネーションに起伏が少ないと言われたこともあります。これは、私の性格や育ってきた環境によるものかもしれません。

アギーレ：私はスペイン語を幼いころから使ってきましたし、今も両親の通訳をしています。自分のスペイン語が、ペルーで育ち、ずっとスペイン語を使ってきたネイティブの人のスペイン語とは違うと気づいたのは、最近です。AJAPE（アハペ）の活動に関わるようになり、ペルー人と接する機会が増える中で、「外見はペルー人だってわかるのに、話すとペルー育ちではないとわかる」と言われたことが何度かありました。発音なのか、文法なのか、イントネーションなのか、ほかにもあるのかはわかりません。ショックというより、とても複雑な気持ちになりました。

小波津：日本育ちか、ネイティブか、スペイン語を聞けばわかることもあります。ただ、私はそれを悪いとは思いませんし、相手に指摘することもありません。一方で、私自身は、なるべくきれいなスペイン語を使うように心がけています。大学でスペイン語を教えていますし、AJAPEでスペイン語を学んでいるこどもたちのロールモデルでありたいと思うからです。

――AJAPE（アハペ）という名称がお二人から出ました。お二人が取り組まれているペルーコミュニティの支援団体の活動について、教えてください。

小波津：AJAPEはNPO法人日本ペルー共生協会の略称です。ペルーをはじめとするスペイン語圏から来日する日系人や外国籍のこどもたちを対象に、継承スペイン語教室や学習支援、進学支援、進路相談などの活動を行っています。2021年から私が理事長を務めています。

継承スペイン語教室を始めた当初は、いずれ帰国したときに困らないようにスペイン語を維持することが目的でした。しかし、帰国せずに日本で生活を続ける人も多く、今は親子でコミュニケーションが取れるようにすることが主な目的になっています。大学進学や就職の際にスペイン語が話せると有利になると考えて、学んでいるこどもたちもいます。神奈川県大和市で開催していて、対象は小学1年生くらいからで上限年齢はなく、現在の登録者は30人ほどです。

アギーレ：栃木県真岡市には、AMAUTA（アマウタ）というスペイン語教室があります。こどもたちのルーツに対する意識やスペイン語継承に悩んでいた母親たちによって、活動が始まりました。14年ほど前に始まった当初は、ペルーなどラテンアメリカにルーツを持つこどもたちが、日本で暮らしながらスペイン語やペルーの文化、そしてアイデンティティを維持できるようにすることが目的でした。現在は、スペイン語やペルー文化とのつながりをなくさないようにするというのが最も大きな目的です。こどもたちに楽しく継続して通ってもらうことを重視しています。参加しているこどもは、6歳から12歳くらいまでの20人ほどです。

――支援団体の活動について、課題や展望を教えていただけますか。

アギーレ：AMAUTAでは、「これをスペイン語で何と言うのかな？」と聞くと、

英語や日本語で答えるなど、スペイン語を使うのを避ける場面をよく目にします。スペイン語の名前ではなく、日本語の名前で呼んでもらおうとする子もいます。AMAUTAは、ペルーなどラテンアメリカにルーツを持つこどもたちが周囲を気にせず自由にスペイン語を話したり遊んだりできる安全な場所でありたいと思っています。実際に、こどもたちが楽しそうに過ごす姿や、継続して参加してくれる様子も見られますが、こどもたちが自分のコトバやルーツを肯定的に捉えられる環境をつくるためには、まだまだ工夫や働きかけが必要だと感じています。今後も、こどもたちが安心して自分らしく過ごせる場を目指すとともに、スペイン語を話すことや自分のルーツをポジティブに捉えられるような活動をしていきたいです。

小波津：私は今では普通にスペイン語を話していますが、特に幼少期は話しづらかったです。これが英語だったら、むしろ尊敬のまなざしで見られるのではないでしょうか。一方で、スペイン語などマイノリティの言語を使うと、変な目で見られる場合も実際にあります。こどもたちに、自分たちのコトバを使うのは悪いことではなく、普通のことであると伝え、自由に話せる場所をつくる必要があると考えています。

母語を学びたいと思っても、学ぶ場所を確保するのが難しいという状況は、ペルーに限らず外国にルーツを持つ多くの人に共通しているのではないでしょうか。特に、規模が小さいコミュニティにとっては、切実な問題です。

大きな夢を言えば、スペイン語だけでなく、そうしたマイノリティのマイノリティである人たちの母語教育を行う施設を立ち上げ、それぞれの言語を学べるようにしたいと考えています。自分たちのルーツの文化を体験できるようなスペースもつくれたらいいですね。もちろん、その実現はとても難しいでしょう。まずは、できることから取り組んでいきます。

――お二人は、ご自身のアイデンティティをどのように捉えていますか。

アギーレ：日系ペルー人でもないし、ペルー系日本人というのも何か違います。日本人とペルー人を併せ持っているという感じは自分の中にありますが、それをコトバで定義するのは難しいです。そうした中で、自分は「出身」というコトバが好きではないことに、最近気づきました。自己紹介をするときは、「出身」は絶対使わないと自分の中で決めています。私のルーツはペルーです。

小波津：私は2018年に帰化しているので、書類上は日本人です。ただし自分を日本人とは思っておらず、成人してからペルーで暮らした経験によって、ペルー人、日系ペルー人としてのアイデンティティを強く持つようになりました。また、ルーツが沖縄なので、ウチナーンチュであるという気持ちもあります。夏場は、かりゆしを着て過ごしています。

日本語だけでは駄目なのです

李 英哲 リ・ヨンチョル
朝鮮大学校 外国語学部 教授



――生まれ育った環境について教えてください。

1974年に大阪で生まれ、京都で育ちました。在日朝鮮人三世です。小学校から朝鮮学校に通いました。コトバや文化、歴史をきちんと学び、朝鮮人として育ってほしいと両親は考えたようです。

小学校の入学式のことを鮮明に覚えています。先生が名前を呼ぶと、みんな「예（イェ）」と返事するのです。同級生の多くは朝鮮学校付属の幼稚園に通っていて、朝鮮語での返事が身に付いていました。そこに通っていなかった私だけが「はい」と答えてしまい、周りに笑われました。入学早々、出鼻をくじかれたわけです。とはいえ、こどもですからすぐに慣れました。

――どのコトバを使っていましたか。

在日一世の祖母と暮らしていたので、家庭でも朝鮮語には触れていました。学校の中では、朝鮮語の使用が義務付けられていましたが、一歩外に出ると生活語は日本語になります。私たちの朝鮮語は、日本語の干渉を強く受けており、ネイティブに比べれば当然不完全なものではありますが、それでも努力して母国語を習得し、上達しようというのが朝鮮学校教育の根本にあります。

――朝鮮学校を卒業後は、どうされたのですか。

日本の大学に進み、もともと好きだった歴史を学びたいと思っていたのですが、高校の先生たちから民族教育を担う唯一の大学である朝鮮大学校を勧められました。思春期でもあり、コミュニティの窮屈さも感じていて、あまり気乗りはしていませんでした。それでも1992年、朝鮮大学校の外国語学部に入学しました。3年生のときに日本語学科ができ、私はその第1期生になりました。朝鮮大学校は、朝鮮学校の教員養成も担っています。在日三世、四世と世代が進むにつれていっそう日本語が生活語になり、社会生活上、朝鮮学校でも日本語教育に力を入れる必要が出てきました。そうした背景から日本語学科ができたのです。

当時の日本語学科は教育内容もまだ十分に整っておらず、学科を担う後進を育てる必要があるということで大学院進学を勧められました。私自身もさらに日本語文学を学びたいという思いがあって、法政大学の大学院に進みました。

――大学院では、どのような研究をされたのですか。

植民地文学論を軸に、中島敦を研究しました。高校現代文の教科書にも載っている『山月記』が有名ですが、『文字禍』のように言語をテーマにした作品もあります。修士論文では、作者が少年時代を過ごした、日本統治下の朝鮮半島を舞台にした『虎狩』を取り上げました。コトバと現実の不一致が大きなテーマで、植民地支配下で強制された言語はまがいものにすぎないと描かれています。

中島敦をはじめ植民地を描いた日本の作家たちを研究したことで、自分の言語に対する見方は大きな影響を受けました。私は日本語ネイティブです。でも、日本語だけでは駄目なのです。朝鮮のコトバや文化、民族性を習得しながら、日本語をあえて自分から引きはがして相対視する。そうした見方のベースが大学、大学院時代に形成されました。そして、朝鮮大学校で朝鮮語教育、日本語教育の教員になりました。

――日本語について、どのようなイメージをお持ちですか。

日本語文学が専門ですし、日本語は私の血となり肉となっているコトバです。和歌や短歌、俳句で用いられる日本語独特の表現を、美しい、心地よいと感じる感性も、もちろん持っています。ただ正直に言うと、日本語には、「臭いものに蓋をする」文化と結び付いた言い回しや、責任の所在をあいまいにする表現も多いように思うのです。一方で最近は、稚拙で貧しく、暴力的になり、臭いものをそのまま表現してしまうことが増えていると感じています。

――朝鮮語教育、日本語教育には、どのような思いで取り組まれていますか。

在日朝鮮人は、圧倒的なマジョリティである日本語のシャワーを浴びて暮らしています。そうした中でも、朝鮮語をもっと豊かに習得できる環境をつくりたいと、常に思っています。

ただし、朝鮮語だけでなく、日本語、英語、中国語など多言語教育も重要です。言語習得は、中途半端でもいいと思っています。大切なのは、ハードルを感じず、そのコトバに親しむことです。

例えば、日本語の「いわゆる」に相当する「소위」という朝鮮語があります。授業では、漢字にすればいずれも「所謂」であると、縦書きにして示します。そして、「所」は関係代名詞の「what」に当たると説明し、「謂」の左上にレ点（返り点）を打って読んでみせるのです。このように、一つの語を教えるときに複数言語を用いることで、理解が構造的になります。多言語化には豊かな言語教育の可能性があると思うのです。

――50年後、在日朝鮮人の朝鮮語と日本語の関係はどうなっていると思いますか。

朝鮮学校が民族教育として担ってきた言語教育は、新たなフェーズに入っていくのではないかと考えています。多言語を操ることによって、他者とつながる回路をより豊かに持てる。そういう人がたくさん育っていけばいいなと思っています。そして、多言語話者として、朝鮮と日本、アジアともつながっていくことを期待していますし、夢でもあります。

インタビューを終えて

朝日祥之 あさひ・よしゆき
国立国語研究所 研究系 教授

福永由佳 ふくなが・ゆか
国立国語研究所 研究系 教授



本特集では、日本社会の中でそれぞれの歴史や背景を持ちながら共に暮らしてきたにもかかわらず、圧倒的マジョリティである日本人にとって、日常生活の中ではその存在や言語生活が必ずしも広く知られているわけではない人たちから直接、話を聞かせてもらいました。

具体的には沖縄出身者、デフファミリー出身者、ペルーにルーツを持つ人、在日朝鮮人の生い立ちやこれまでの生活をめぐるさまざまなお話から、自らが生まれながらに身に付けてきたコトバや家庭内で使用してきたコトバを使いつつも、家庭や学校を一歩出れば、日本語と向き合う必要があることを教えてもらいました。そして、そのような言語生活の中で自分自身の「コトバ」を実践することの勇気や強み、そこに込められた期待について教えていただいたようにも思います。

コトバは、人類の歴史において常に接触し、混交してきました。その過程に見られるコトバの多層性やバイタリティ、ポリティクスについて、私たちは改めて考える必要があるように思います。

本特集の趣旨にご賛同いただき、インタビューにご協力くださった皆さんに、心よりお礼申し上げます。

私たちは「言語」というと、文法書や辞書に記述された、中立的で静的な存在を思い浮かべがちです。しかし、今回のお話から見えてきたのは、コトバは決して一様なものではなく、一人ひとりの経験や暮らし、人や社会とのつながりの中にあり、それぞれの人にとって異なる意味を持つ存在だということです。

「多文化共生」ということばを耳にするようになって久しくなりました。しかし、今回の特集を通して見えてきたのは、外国から来た人々が増えたことによって初めて私たちの社会が多様になったわけではない、ということではないでしょうか。地域のコトバ、手話、外国にルーツを持つ人々が使うさまざまなコトバ――私たちの社会には、もともと多様なコトバがあり、人々はそれぞれのコトバと共に暮らしてきました。

「私たちのコトバ」と「彼らのコトバ」を分けて考えるのではなく、私たちが暮らす社会にある多様なコトバに目を向けること。そこから、「ニホンゴを使う人たちと日本社会」の新しい姿が見えてくるのではないでしょうか。

日琉言宝（にちりゅうげんぽう）

日本語諸方言と琉球諸語を集めた宝の倉

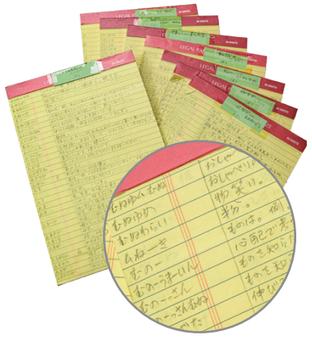
「日琉言宝」は、日本語諸方言と琉球諸語の言語データを登録・公開・提供するプラットフォームです。
開発者であるセリック・ケナン国語研特任助教は、名前の由来を次のように語ります。
「日本語諸方言と琉球諸語は、豊かな多様性を持ち、地域の人々にとってかけがえのない宝です。また、共通の祖先である日琉祖語から生まれたものであり、日本列島における言語の歴史を知る上でも重要な宝です。そのような宝であることばを集めたものという意味を込めて『日琉言宝』と名付けました」
「日琉言宝」にはどのような特徴があり、何を可能にし、何を目指しているのでしょうか。
セリック特任助教に聞きました。

日本語諸方言と琉球諸語の言語データが収められています

私は、南琉球宮古語と八重山語の記述的研究を行っています。地域を訪れ、人々がどのようにことばを使っているかを記録し、発音や談話も録音します。「日琉言宝」には、こうしたフィールド調査で集めた言語データが収められています。



石垣島の大浜集落で行った、八重山語大浜方言の調査の様子。
手前は話者の前津栄昭さん（左）と大島克博さん（右）。



これは、地元の方が作成した方言辞典の原稿です。外部から訪れる研究者だけでは集めきれないほど、量・内容ともに充実しています。こうした貴重な資料もお借りして電子化し、品詞や活用、アクセントなどの言語学的情報を加えます。

収集したデータは規格化した上でExcelで編集し、そのファイルを「日琉言宝」にアップロードします。使い慣れたソフトウェアでデータセットを作成し、そのまま登録できるようになっています。

項目 ID	語義番号	意味 ID	同源語 ID	仮名表記	ローマ字表記	拍数	アクセント型	品詞	日本語の対訳	日本語の読み
lexeme_id_db	entry_id	meaning_nb	meaning_id	unicog_working_id	form1	form2	length	accent_class	pos	meaning_jp	meaning_yomi
54599	1582	1	1692	入.n.v	ぬっふぃ	nuffi	3		動	（穴や見えないところに）入れる。挿入	（あなやみえないところに）いれる。そうにゅうする
54600	1904	1	2022	尻.s.n	すーず	s:;s:i	3		名	（油と対照的に）肉。赤身	（あぶらとたいしょうてきに）にく。あかみ
54601	2204	1	2330	止.t.v.4	とぅるム	turum	3		動	（雨が）止む。（車が）止まる	（あめが）やむ。（くるまが）とまる
54602	1082	1	1165	除.k.n	かたか	kataka	3		名	（雨や風の）よけ。遮蔽物	（あめやかぜの）よけ。しゃへいぶつ
54603	623	1	695	墨.k.n	つふい	ffi	2		名	（烏賊や鯛の）墨	（いかやだこの）すみ
54604	1081	1	1164	片伍.k.n	かたぐー	katagu:	4		名	（一対をなすものの）片一方のもの	（いっついをなすものの）かたいっぽうのもの
54605	1688	1	1799	傍.p.n	ばた	pata	2		名	（器などの）縁。端	（うつわなどの）えん。はし

データを追加・更新できます

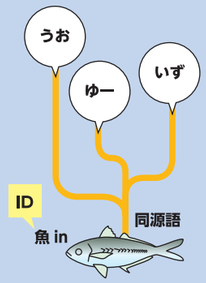
言語調査には長い時間がかかり、データは少しずつ集まります。データがある程度まとまった段階で論文や資料集として発表しますが、いったん発表すると、その後の調査で得られたデータを追加したり、研究で明らかになった内容を更新したりすることが難しいという課題がありました。「日琉言宝」では、データ登録後も調査や研究の進展に応じて、作成者自身が何度でもデータを追加・更新でき、更新履歴も記録されます。

追加・更新が必要な理由

琉球諸語はもともと話者人口が少ない上に、日本語への移行によって話者の減少が進んでおり、記録と継承のために使える時間は限られています。辞書や資料を何年もかけて完成させてから公開するのではなく、得られたデータを順次公開し、現在の話者や研究者が活用できるようにすることが重要です。データの少ない言語では、編集途中の辞書や資料であっても、新たな記録や研究につながる貴重な資源になります。

同源語IDによってデータセットが結び付いています

日本語諸方言と琉球諸語のデータは、方言や研究者ごとに異なる形式で作成されています。「日琉言宝」は、これらのデータを一つのプラットフォームに集約します。さらに各語に「同源語ID」を付与することで、方言や研究者ごとのデータセットを超えて、互いに対応する語を結び付けています。これにより、複数のデータセットをまとめて検索できるだけでなく、関連する語をたどりながら、データセット間を行き来できます。



「同源語ID」とは？

日本語諸方言と琉球諸語は、共通の祖先である日琉祖語にさかのぼることがわかっています。日琉祖語の一つの語が、それぞれの言語や方言の歴史の中で発音や意味を変えてきました。発音や意味が異なっていても、同じ語に由来する語どうしを「同源語」と呼びます。

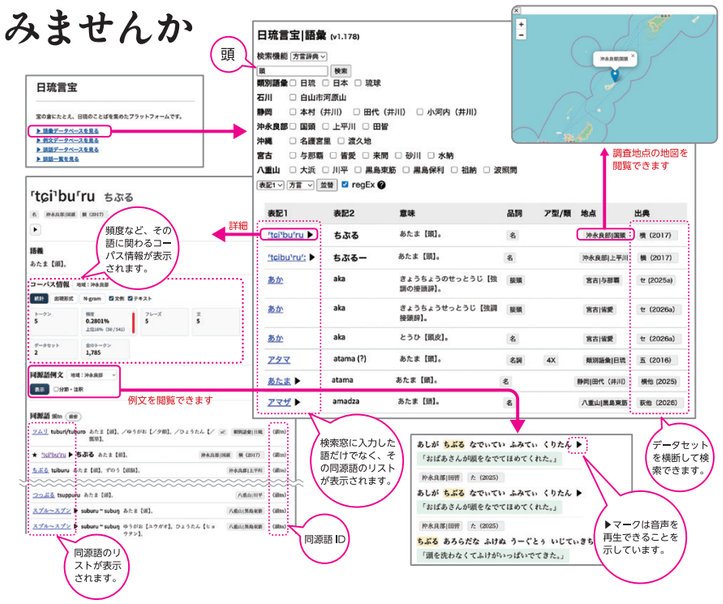
例えば、沖永良部語の「ゆー」と八重山語の「いず」は、日本語の「うお」と同じ起源を持つ同源語です。これらの語を登録する際には、同源語ID「魚in」を付けます。

「日琉言宝」を使ってみませんか

「日琉言宝」は、「語彙」「例文」「談話」の各データベースと「談話一覧」で構成されています。検索窓に語を入力すると、複数のデータセットを横断して検索できます。入力した語だけでなく、同源語のリストも表示される点が大きな特徴です。音声の再生や地図の閲覧、データベース間の行き来もできます。

右は「頭」という語を検索した例です。同源語として「ちぶる」「ツムリ」「スブル」などが表示され、その中には「ゆうがお」「ひょうたん」を意味する語として使われるものもあることがわかります。気になる語を検索してみませんか。

日琉言宝
https://kikigengo.ninjal.ac.jp/nrdb/



日本列島の言語の歴史を明らかにすることを目指しています

日本語諸方言と琉球諸語がいつ分岐したのかについてはさまざまな説がありますが、少なくとも奈良時代（8世紀）以前に分岐したことがわかっています。さまざまなことばを同源語IDでつなげて比較することで、日琉祖語の姿を推定し、ことばがどのように分かれて変化してきたかを明らかにする――それが、「日琉言宝」の目指すところです。

日本語諸方言や琉球諸語では、新たな話者を育て、言語を次世代へ継承していくための言語復興も試みられています。「日琉言宝」は言語を学ぶためにも役立つはずで、将来はこれを生かした教材の開発も視野に入れています。

これらを実現するには、さらに多くのデータセットが必要です。研究者が調査データを登録・公開したいと思い、多くの人に利用され、長く使い続けられるプラットフォームを目指しています。ぜひ、宝の倉の扉を開けてみてください。



セリック・ケナン Kenan Celik
国立国語研究所 研究系 特任助教

ことばを学び、話すことが好きなんです。フランスで生まれ、遠い日本のことばに興味を持って来日しました。大学院で言語学を学んでいたとき、宮古語を聞いて「日本語に似ているけれど、日本語ではない。なんだ、この言語は!?」と衝撃を受け、宮古島に移住。2年間、宮古語漬けの日々を送りました。困ったのは、教科書がなかったことです。そこでデータを集め始めたのですが、集まると整理したくなり、研究の道へ進みました。

「オタクのラテン語」のいま



松本友也

まつもと・ともや。ライター。取材記事制作のほか、東アジアのファンカルチャーに関する執筆なども手がける。現在は NPO 法人 bootopia 理事として、「日本語の現場」をテーマとしたリサーチやアート実践に取り組む。寄稿に『アイドルについて葛藤しながら考えてみた』(青弓社、2022年)など。

日本語は、世界の二次元コンテンツファンからしばしば「オタクのラテン語」と呼ばれている。アニメやゲームを翻訳ではなく「原典」で味わうための、オタク文化の教養語という意味だ。もちろん現在もその役割は大きいが、海外の VTuber(CG で描画されたアバターを用いて動画投稿や配信活動を行う「バーチャル YouTuber」の略称)の配信を見ていると、この「オタクのラテン語」が少し違う顔を見せはじめているように感じる。

たとえば、ホロライブインドネシア所属の VTuber、パヴォリア・レイネ(以下レイネ)とアイラニ・イオフィフティーン(以下イオフィ)のコラボ配信を見てみよう(**図**)。レイネがイオフィからスンダ語を教わる場面で、こんなやりとりがある[※1]。

レイネ:So like I ketularan gitu. I got infected.
(だから、まわりから〔スンダ語が〕感染(うつ)っちゃったみたいな感じ。影響受けたんだよね)
イオフィ:Basically, if you could handle the mah and cenah, you basically certified Sundanese.
(基本的に、「mah」と「cenah」を使いこなせたら、もうスンダ人認定だよ)
レイネ:**あ〜、なるほどね？　わかったわかった**
※太字は日本語、それ以外は英語・インドネシア語・スンダ語での発話。かっこ内の日本語訳は筆者によるもので、以下も同様。

ほんの数往復のあいだに、インドネシア語、英語、スンダ語、日本語が飛び交う会話。ふたりとも日本語が堪能なので、発話そのものは不思議ではない。ただ、日本の視聴者に語りかけているわけでもないのに、日本語をごく普通の相槌として使っているのは、だいぶ奇妙な感じがするかもしれない。

ただ、これは VTuber 文化が日本のオタクカルチャーから生まれたということを考えれば、そこまで不自然なことでもない。演者と視聴者は、ゲームやアニメの固有名詞、特有のミームやスラングといったコンテクストを国境を越えて共有しているし、海外の視聴者も、配信を見ているうちに「kawaii(かわいい)」や「oshi(推し)」といった頻出の日本語を自然に身につけていく。「kusa(草)[※2]」のように少し複雑なスラングについても、ファン有志の用語集や翻訳字幕などを通じて、意味や使い方が伝えられてきた。

しかし興味深いのは、日本語を話せないはずの VTuber までもが、あえて「普通の日本語」を雑談に織り交ぜはじめるケースもあることだ。たとえば、インドネシア・ジャカルタを拠点とする JKT48V に所属し活動していた VTuber、ピア・メラレオは、ある日の配信でこんな表現を使っていた[※3]。

tapi **zannen desu** aku ada pekerjaan dan kegiatan hari ini
(でも **残念です** 今日は仕事と用事があって)

彼女は、ふだん日本語で配信しているわけではない。にもかかわらず、唐突に差し込まれたこの「残念です」は妙に自然でこなれている。視聴者たちも特に意味を問うことなく、何事もなかったかのように雑談は流れていく。どういうことだろうか。



図:レイネ(右)がイオフィ(左)からスンダ語を教わる配信の一場面
「あ〜、なるほどね？　わかったわかった」と日本語で相槌を打っている。画面内のチャット欄もインドネシア語・英語・日本語が入り混じり、「Sasuga Ms. World Wide」(赤枠)というコメントがみられる。
("Reine is Learning Bahasa Sunda with Iofi-sensei!!!" (14:53) より。プライバシーの観点から一部加工)

別の例も見てみよう。主に英語圏で活動するホロライブ English 所属の VTuber、エリザベス・ローズ・ブラッドフレイム[※4]は、日本旅行の思い出を英語で語るなかで、日本では「ガーリックブレッド」がたいてい「ガーリックトースト」と呼ばれる、という他愛ない気づきに触れ、こう発話した。

I'm like, Oh! **Naruhodo**
(「ああ、**なるほど！**」って感じ)

彼女も流暢な日本語話者というわけではない。それなのに、この「なるほど」は単語の意味が合っているだけでなく、小さな発見が腑に落ちた瞬間の、思考のテンポにまでぴたりとはまっている。

日本語話者でない彼女たちが、同じく日本語話者でない人に向けた配信のなかで、ごく「自然に」日本語を織り交ぜるという奇妙な現象。おそらくそこに特別深い意図はなく、雑談のなかのちょっとした遊び心と考えるのが妥当だろう。実際、「残念です」や「なるほど」といった言葉は、ここでは客観的な情報ではなくリアクションや感情を表現する役割を担っている。だからこそ日本語を知らない視聴者であっても、前後の文脈や声のトーン、間合いから、なんとなくニュアンスを感じ取ることができる。

加えて、VTuber 文化の根底に日本のオタクカルチャーがあるという前提が演者と視聴者のあいだで共有されていることまで踏まえれば、この一連の発話もそう不自然なものではない。むしろ、「正確な意味はわからずともニュアンスは伝わる」日本語がふいに飛び出す現象そのものが、雑談配信にちょっとした新鮮味を与えつつ、わからなさを楽しむ内輪のコミュニケーションを補強しているのかもしれない。

そう考えると、「オタクのラテン語」たる日本語も、少し違った表情を見せはじめているといえるかもしれない。かつては「コンテンツを楽しむために学ぶ言葉」だった日本語が、今や「内輪で使って楽しむ言葉」へと変化しつつある。いずれにせよ、彼女たちの配信を眺めていると、よく知っているはずの母語の知らない姿を覗き見ているようで、妙にくすぐったい感じがするのである。

※1　元配信:Reine is Learning Bahasa Sunda with Iofi-sensei!!!
https://www.youtube.com/watch?v=WyGNG3Q4HNM
(15:05-)
発話の確認と表記にあたり、下記切り抜き動画(ぶいめい氏)の字幕を参考にした。
https://www.youtube.com/watch?v=RoxUwHmrOlQ

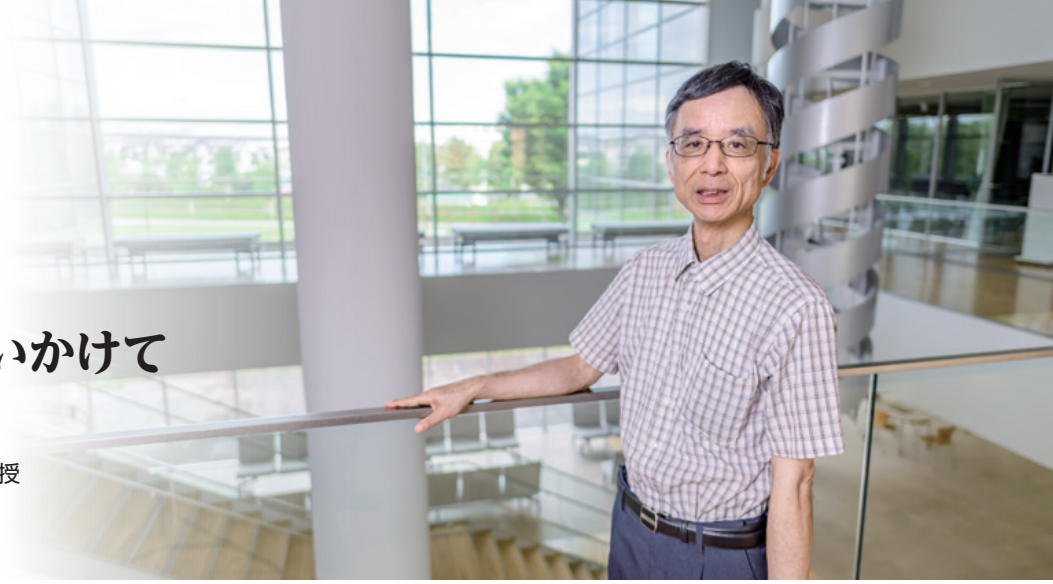
※2　「笑い」を示すネットスラング。「笑(わら /wara)」が「w」と略され、連打された「wwww」が草原に見えることから転じて「草」と呼ばれるようになった。それをローマ字化したものが「kusa」。

※3　元配信:【TALK】PIAGI!
https://www.youtube.com/live/4q7b_MP8VZI(5:18-)
インドネシア語の表記は、下記切り抜き動画(Hime Clip. 氏)の字幕を参考にした。
https://www.youtube.com/watch?v=onjkWU2vz24

※4　元配信:【 #ERBday2026 】Birthday Afterparty YAP ~!
https://www.youtube.com/watch?v=UbxwW-ZM6Os
(2:02:47-)
発話の確認にあたり、下記切り抜き動画(がるぜん氏)を参考にした。
https://www.youtube.com/watch?v=VJP1aNpK9UA

記載の URL は 2026年8月末時点のものです。

インタビュー



ことばの変化を追いかけて

新野直哉　国立国語研究所 研究系 教授

――国語研ウェブサイト「ことば研究館」の「ことばの疑問」で、「役不足」「名前負け」について執筆されています。どのような研究をされているのでしょうか。

「誤用」や新語など、近現代の日本語に見られる意味や用法の変化を中心に研究しています。「役不足」「名前負け」は、「誤用」として話題となることばの代表例です。ほかにも「煮詰まる」「気がおけない」「世間ずれ」などを研究対象としてきました。

――対象のことばをどのように選び、研究を進めるのですか。

文化庁が毎年発表している「国語に関する世論調査」を参考にすることもあります。それは話題になっている事例が中心です。新聞や雑誌、普段の生活で気になったことばをメモしておき、そこから選ぶこともあります。対象が決まったら、まず用例を集めます。次に、それぞれがどのような意味で使われているかを判断し、意味ごとの割合や年ごとの推移などを分析します。

用例の集め方は大きく変わりました。私の若いころは、新聞を1年分調べようとしたら、自分で読まなければならず大変でした。今は、各社が記事データベースを整備しているので、検索すれば一瞬で用例が集められます。その分、分析や考察に充てられる時間が増えました。これは大きなメリットです。

――記事データベースを使うことによるデメリットはありますか。

広告にも興味深い用例がありますが、記事データベースには収録されていません。また、新聞や雑誌を実際に読んで用例を集めていると、別のことばの使い方が目に留まり新しい研究につながることもありますが、データベース検索ではそうした出会いは起こりにくくなります。そこで、紙面も組み合わせて使っています。

情緒的な話ですが、昔は用例集めに苦労した分、一つ一つに思い入れがありました。30年以上前に食堂に置いてあった雑誌で見つけた用例をメモした箸袋を見ると、その時のことを思い出します。データベースで集めた用例にはそういう思い入れは生まれません。またデメリットではありませんが、データベースでは同じことばを同じ方法で検索すれば誰もが同じ結果を得られます。だからこそ分析では、どこに関心を持つかが昔より重要になります。

――ご自身は、どのような点に関心をお持ちなのですか。

ことばの意味や用法の変化に加え、そうした変化を同時代の人々がどう受け止めているのかという「意識」に関心があります。私が一番長く研究している「全然」が肯定を伴う用法についていうと、平成期の読売新聞では、2003（平成15）年までは容認しない記事、2004～2008年は容認しない記事と容認に傾いた記事の両方が載っていましたが、2008（平成20）年を最後に「全然」の用法に関する記事自体が載らなくなりました。これは、この語に関する人々の意識が変わっていった結果ではないかと考えています。

――最近気になっていることばはありますか。

それは企業秘密なのですが……。一つ挙げると「詰む」です。将棋用語の「詰む」が、「もうどうにもならなくなる」という意味の若者ことばとして使われ、新聞の政治記事でも見られるようになりました。「成金」「高飛車」など将棋用語から一般化したことばはほかにもありますが、「詰む」がなぜ若い人に使われるようになり、どう広まったのかを調べてみたいです。

――私たちは普段、「誤用」に気を付けたほうがよいのでしょうか。

とかく、自分が使わないことば、なじみのないことば、好きでないことばを「間違ったことば」「悪いことば」と言ってしまいがちですが、そのように決め付けないことが大事なのだと思います。用例を集め、どう変化してきたかを分析して示す。それが研究者の務めです。その変化が良いか悪いかは、それを見た人がそれぞれ判断すればよいというのが、私の考え方です。

――なぜ、ことばの変化を研究テーマに選んだのですか。

40年近く前、ある地方大学の教員として本格的な研究者生活を始めました。国語研のようには研究資料がそろっておらず、インターネットで資料を見られる時代でもありませんでした。新聞や雑誌から用例を探して分析する研究ならば、その環境でもできると考えたのです。環境が違えば別の研究をしていたかもしれません。

――最後に、今後の展望をお聞かせください。

「気がおけない」は本来「気配りや遠慮をしなくてよい」という意味ですが、「油断できない」という意味で使われる例もあります。後者の意味での初出は、私の2020年の著書では1937（昭和12）年としています。その後、全文検索できる資料が大幅に増えている「国立国会図書館デジタルコレクション」で調べ直すと、1906（明治39）年の用例が見つかりました。近年は資料のデジタル化が進められているので、次々と新しいことがわかってくるでしょう。これからも、ことばの変化を追い続けたいと思っています。

書籍紹介

Word-Prosodic Systems of Japonic Languages



Endangered and Lesser-Studied Languages and Dialects, Vol. 5

Yosuke Igarashi, Kenan Celik, Tatsuya Hirako and Aoi Hayato〈Eds.〉

Brill　2026年

本書は日琉諸語17変種の韻律体系を共通の枠組みで記述した専門書です。これまで海外に向けて紹介する際には、日琉諸語から国際的な議論になじむ現象を選ぶことが一般的でした。料理にたとえれば、既存の調理法に合う素材だけを選ぶようなものです。本書では、新しい調理法が生まれることを願って、日本語学独自の枠組みや用語法を整理した上で、日琉諸語が持つ豊かな素材をまな板に載せ、国際的な研究との橋渡しを試みました。

▶ 五十嵐陽介

シリーズ言語資源学 日常会話コーパスの設計・構築・利活用



小木曽智信、山崎 誠〈監〉、小磯花絵〈編著〉、臼田泰如、居關友里子、川端良子、西川賢哉〈著〉

研究社　2026年1月

本書は、『日本語日常会話コーパス』（CEJC）の構築経験をもとに、会話コーパスの設計から構築、利活用までを、初学者にもわかりやすく解説した一冊です。後半ではコーパス検索アプリケーション「中納言」、映像解析ソフト ELAN、音声分析ソフト Praat、リレーショナルデータベースを用いた具体的な分析方法も紹介。CEJC を使ってみたい方だけでなく、会話コーパスの構築や、音声・動画を含む言語資源の利活用に関心のある方にもお薦めです。

▶ 小磯花絵

地域における日本語学習支援の展開と共生社会 「のしろ日本語学習会」との連携・協働、縦断調査を踏まえて



野山 広〈編著〉

ココ出版　2026年3月

本書は、外国人散在地域（秋田県能代市）での約18年にわたる縦断調査（OPI = Oral Proficiency Interview の枠組みを用いた会話・対話や言語生活に関するインタビューなど）の結果を踏まえた学際的な観点からの論考や関連した座談会の報告などをまとめた論文集です。多様な言語・文化背景の人々の学びの場の確保、第二言語としての日本語の習得から摩滅に至る学習者のライフステージへの対応の重要性について Welfare Linguistics（福祉言語学）的観点から触れながら、地域日本語教育／学習支援のあり方を示す羅針盤の一冊となることを目指しました。　▶ 野山 広

歌う日本語♪ 歌謡曲の言語と文学



田窪行則〈編〉、柏野和佳子、山崎 誠ほか〈執筆〉

文学通信　2026年4月

カラオケが大好きな編者のもとに、共に歌った仲間が集まり、総勢21名の研究者で編んだ一冊です。表記や発音、ラップの韻、文法、役割語、ジェンダー、敬語、AI による歌詞分析、和歌や音楽史など、さまざまな観点から歌謡曲や J-POP を軽妙に読み解きます。知っている歌が、少し違って聞こえてくるかもしれません。歌声まではお届けできませんが、一緒にカラオケを楽しむような気分と共に、歌詞の面白さが伝わりますように。

▶ 柏野和佳子

入門 デジタルメディアの言語研究



デジタルコミュニケーション研究会〈編〉、落合哉人、菊地 礼、黒田一平、酒井晴香、新山聖也、西村綾夏、山崎由佳〈著〉

ひつじ書房

2026年6月

いまや日常の至るところで目にするデジタルメディア上のことばを、言語学の基礎から読み解く入門書です。インターネットスラングや絵文字、LINE のチャット、ビデオ通話、ライブ配信を取り上げ、テーマの決め方から分析の進め方までを示します。公開されているコーパスから用例を探す方法や、API を使って自分でデータを集める方法も紹介します。踏まえるべき研究倫理の解説もあり、初学者から研究者まで幅広く役立つ一冊です。

▶ 落合哉人

日本の識字率はほんとうに高いのか？ 「当たり前」を問い直すために



野山 広、朝日祥之、横山詔一、竹本直也〈著〉

文学通信　2026年2月

「日本の識字率は 99%以上」という通念に対し、本書は 1948年以来全国調査が行われず実態が不明であることを指摘します。日本語非母語話者や視覚・聴覚障害者、就学機会を得られなかった人などが共生する現代に応じた識字調査の復活、継続を提唱する一冊です。

▶ 野山 広

本物の読解力



石黒 圭〈著〉

SBクリエイティブ

2026年3月

日本語の文章が読めない。その原因を突きつめると、次の三つの困難点に至ります。①正確に読めない、②行間が読めない、③書いていないことまで読んでしまう。本書は、そんな読解の困難点を見直し、確かな読み方を身に付けるための一冊です。

▶ 石黒 圭



コーパスで学ぶ日本語学 日本語の文章・文体

山崎 誠〈編著〉、高崎みどり、星野祐子、馬場俊臣、庵 功雄、小林雄一郎〈著〉

朝倉書店　2026年6月

国立国語研究所の研究者が関わった書籍を紹介します（2026年1～6月発行）